

知識創造共同体としての 浦河べてるの家における当事者研究 ナレッジ・マネジメント理論による分析

いとうたけひこ 所員／現代人間学部教授

——問題

「当事者研究」とは精神障害者同士が自分の助け方について一緒に研究をすることであり、SST（生活技能訓練）および「自己研究」を発展させて、2002年に浦河べてるの家から始まった¹⁾。大高・いとう・小平²⁾は、当事者研究のウェブサイト进行分析し、当事者が自分自身を取り戻すために仲間と共に当事者研究によって考えるという特徴を明らかにし、当事者の「苦勞を仲間とともに取り戻す」意義をテキストマイニングにより明らかにした。しかし、この分析は当事者研究の産物である報告文の構造的・形式的な解析が中心であり、そのプロセスがどのような構造を持っているかは必ずしも明確ではなかった。

ところで、吉永・斎藤³⁾は、富山大学における発達障害のある学生の支援のための取り組みを、経営学の知見を用いながら紹介している。このような経営学的な枠組みを臨床や福祉の分野に応用していることは興味深い。

本研究では、富山大学の実践の場合と同様、経営学の理論の中でも、野中らのナレッジ・マネジメント（知識経営）理論に着目した。ナレッジ・マネジメント

- 1) べてるしあわせ研究所・向谷地生良（2009）『レッツ！ 当事者研究 1』NPO法人コンボ。
- 2) 大高庸平・いとうたけひこ・小平朋江（2011）「精神障害者の自助の心理教育プログラム『当事者研究』の構造と精神保健看護学への意義：『浦河べてるの家』のウェブサイト『当事者研究の部屋』の語りのテキストマイニングより」『日本精神保健看護学会誌』, 19(2), pp. 43-54。
- 3) これは、文部科学省の平成19年度学生支援プログラムGPの補助を受け、発達障害学生支援システムの構築に着手し、実践を重ねている活動である。「富山大学は、設計段階から発達障害大学生支援に最適化されたシステムを構築するという戦略的な意図に基づいてその実現を目指してきた。同時にこのシステムは従来の学生相談システムや、障害学生支援システムの延長線上にあるものではなく、いくつかの新たな発想に基づいて構築されたものでもある」。
吉永崇史・斎藤清二（2010）「システム構築と運営のためのナレッジ・マネジメント」斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史（編）『発達障害大学生支援への挑戦：ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント』金剛出版、pp. 68-108。

とは、「経営のあり方を知識の創造と活用という視点から構築すること」⁴⁾である。事業の目的を達成したり、課題解決のための知識を創造し、その知識を資産として活用するプロセスと、既存の知識資産を活用しながら新しい知識創造を行うプロセスとをダイナミックに連動させるための経営手法である。この理論的枠組みを、当事者研究という精神障害者の自助活動にあてはめることができるかどうかは興味深い。すなわち、当事者研究活動とは、吉永・斎藤⁵⁾が特徴付けたような「支援のあるべき姿を追求するための行動指針をコミュニティ全体で共有しながら、異なる知識や実践能力をもつ支援者間の対話と実践を促進し、支援で得られたノウハウ（暗黙知）を言語（形式知）化して共有し、次の支援に活かしていく連続的な営み」という「アクション・リサーチ（実践研究）」であるのかどうかを検討していきたい。

ナレッジ・マネジメント理論の中核概念は知識（knowledge）である⁶⁾。この知識概念はマイケル・ポラニー⁷⁾のいう暗黙知の理論が背景となっている。暗黙知は、ポラニーの概念であり、「我々は語るができるより多くのことを知ることができる」と表現されているように、言語・文章で表現することが難しい主観的で身体的な知であり、特定の文脈ごとに経験の反復によって具体化される思考スキルや行動スキルも含まれる。これに対して形式知は、言語や文章や数式などの記号で表現できる客観的で理性的な知であり、特定の文脈に依存しない一般的な概念や論理、例えば、理論、問題解決手法、マニュアル、データベースなどがこれに該当する⁸⁾としている。暗黙知と形式知とを、野中・紺野⁹⁾は表1のように比較・整理を行っている¹⁰⁾。

暗黙知の役割を重視した野中らの知識創造理論は、看護学でも中山¹¹⁾が相互作用的知識創造の理論の中に積極的に取り入れている。これを発展させて、小平・

4) 野中郁次郎・遠山亮子（2006）「知識経営の理論」野中郁次郎・遠山亮子編『MOTテキスト・シリーズ 知識創造経営とイノベーション』丸善。

5) 吉永崇史・斎藤清二（2010）、前掲書3）。

6) 野中郁次郎・遠山亮子（2006）、前掲書4）。ここでは、知識の特質を、(1) 全人性：論理のみならず信念（価値）や身体化されたスキルを包含したものである、(2) 文脈依存性：時間・場所・人との動的な関係性の中で立ちあらわれる、(3) 多視点性：一視点からの「情報」ではなく多視点から真理に接近するプロセス、(4) 可謬性：仮説を立て理論を反復しつつ真理に接近するプロセスである、という4つの観点から整理している。

7) Polanyi, M. (1966) *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul, London. (佐藤敬三訳 (1980) 『暗黙知の次元：言語から非言語へ』紀伊国屋書店) 訳書、p. 15。

8) 野中郁次郎・遠山亮子（2006）、前掲書4）。

9) 野中郁次郎・紺野登（2003）『知識創造の方法論：ナレッジワーカーの作法』東洋経済新報社。

10) 形式知という用語は野中らの用語であり、ポラニーが行っているわけではないという指摘もある。大串正樹（2007）「ナレッジマネジメント：組織論的な視点で捉える暗黙知の共有」『インターナショナルナーシングレビュー』32(4), pp. 23-27。

11) 中山洋子（2004）「看護の“知”の水脈を探る」『聖路加看護学会誌』8(1), pp. 44-49。

表1 暗黙知と形式知の比較

暗黙知 tacit knowledge	形式知 explicit knowledge
言語化しえない・言語化しがたい知識	言語化された明示的な知識
経験や五感から得られる直接的知識	暗黙知（区切られた）から分節される体系的知識
現時点（今、ここ）の知識	過去の（区切られ整理された）知識
身体的な勘どころ、コツと結びついた知識	明示的な方法・手順、事物についての情報を理解するための辞書的構造
主観的・個人的	客観的・社会（組織）的
情緒的・情念的	理性的・論理的
アナログ知、現場の知	デジタル知、コードの知
特定の人間、場所、対象に特定・限定されることが多い	情報システムによる補完などにより時空を超えた移転、再利用が可能
身体経験をともなう共同作業により共有、発展増殖が可能	言語的媒介をつうじて共有、編集が可能

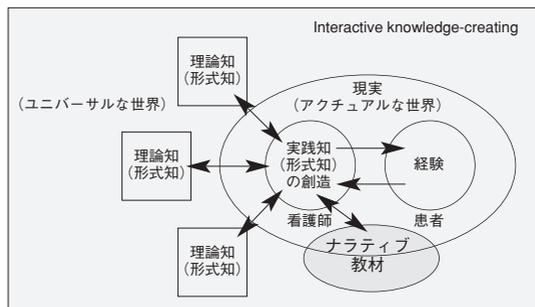
*野中郁次郎・紺野登 12) を一部改変

いとう・大高¹³⁾は中山の知識創造理論を参考にしたモデル（図1）を紹介した。そこでは、「実践知」と「理論知」を対照させた上で、ナラティブ教材の位置づけを行っている。

知識創造のプロセスをモデル化したものがSECI（セキ）モデル（図2）といわれるものである。このプロセスは4つの知識変換モードすなわち、「共同化（Socialization）」、「表出化（Externalization）」、「連結化（Combination）」、「内面化（Internalization）」が順にあらわれることを想定しており、この4つのモードの頭文字を取って命名された。

最初の（1）共同化モードでは、個人の暗黙知が集団の暗黙知へと転換され、身体・五感を駆使し、直接経験を通じた暗黙知の獲得、共有、創出が行われる。次にあられる（2）表出化モードでは、集団の暗黙知から個別の形式知への転換によって、対話や省察による暗黙知の明示化や

図1 暗黙知と形式知と看護理論：看護師の知識創造モデルにおけるナラティブ教材の位置づけ



*小平朋江・いとうたけひこ・大高庸平 14) に加筆

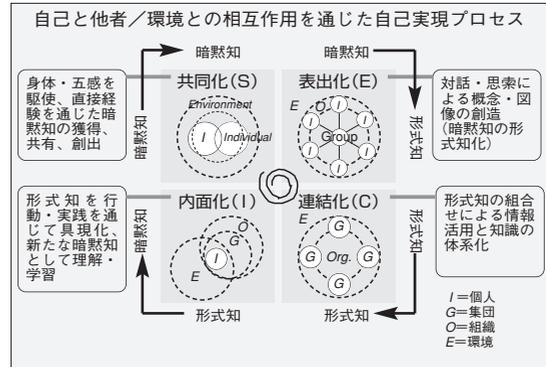
12) 野中郁次郎・紺野登 (2003)、前掲書9)。

13) 小平朋江・いとうたけひこ・大高庸平 (2010)「統合失調症の闘病記の分析：古川奈都子『心を病むってどうということ？：精神病の体験者より』の構造のテキストマイニング」『日本精神保健看護学会誌』、19(2)、pp. 10-21。

14) 小平朋江・いとうたけひこ・大高庸平 (2010)、前掲書13)。

概念化が行われる。さらに (3) 連結化モードでは、個別の形式知から体系的な形式知への転換によって形式知の組み合わせによる新たなアプローチでの情報活用と、知識の体系化が行われる。最後にあらわれる (4) 内面化モードは体系的な形式知から個人の暗黙知への転換により、形式知を行為・実践を通じて具現化し、新たな暗黙知として理解し、学習が行われる。

図2 SECI (セキ) モデル：組織的知識創造モデル



* 國領二郎・野中郁次郎・片岡雅憲 (2003) 15) より

I 共同化 (Socialization) のモード

図2の左上では個別の暗黙知を共有された暗黙知に広げる作業が行われ、身体と感覚による直接経験を通じた暗黙知の獲得と共有と創出が行われる。この作業は、集団的な自助組織である浦河べての家の理念、「弱さの情報公開」によって示されている。これにより一人の苦勞をみんなで理解する、「苦勞の共有」が行われ、これが当事者研究のスタートとなる。

共同化のモードは組織内外の活動による現実直感と、感情移入・気づき・予知の獲得によって、暗黙知が集団やコミュニティに共有される過程を指す。そのように共有されるなかで、暗黙知が他のメンバーに伝授され、グループ全体に移転されるプロセスである。

II 表出化 (Externalization) のモード

図2の右上の表出化のモードは、暗黙知から形式知に変換する活動であり、対話や省察による暗黙知の明示化・概念化が行われる。ここでは、比喩や類似、仮説的推論、物語を用いた暗黙知の明示化がなされ、暗黙知が概念やイメージや原型に変換されるのである。当事者研究では、共感的な共有 (共同化) の次に、言葉やイラストなどをとおして可視化され、概念化された形として知識 (形式知) の共有が行われる段階である。

III 連結化 (Combination) のモード

連結化のモードでは、形式知の組み合わせによる情報活用と知識の体系化が行

15) 國領二郎・野中郁次郎・片岡雅憲 (2003) 『ネットワーク社会の知識経営』NTT出版。

われる。ここでは帰納と演繹と仮説生成¹⁶⁾により、共有化された形式知が分類され、命名され、定義づけられ、再定義され、体系化される。このモードでは、形式知の収集と統合化、概念間の関係生成とモデル、形式知の統合と操作化、システム化が行われる。浦河べてるの家の当事者研究では、仲間の苦労が自らの言葉とディスカッションによって定式化され、解決法が創造的に生み出される段階である。

IV 内面化 (Internalization) のモード

形式知を行為・実践を通じて具現化し、行動で確かめることにより、新たな暗黙知として理解し学習することである。ここでは省察的实践を通じた形式知の具体化が行われ、目標—成果の持続的実践の実践がなされる。当事者研究では得られた苦労の解決法を、当事者自身が実行して実験する段階である。実験を通して得られた暗黙知はグループさらにはコミュニティ全体に還元され、知識の財産となる。

以上のように、これらの4つのモードが4サイクルエンジンのように繰り返され、らせん状に知識が作られていく。これが野中らの知識創造理論 (ナレッジ・マネジメント理論) の基本的な考え方である。

なお、SECIモデルによる知識創造理論は看護学の分野においても重視されており、看護の智 (ナレッジ) における暗黙知の重要性を指摘して、暗黙知と形式知の螺旋的発展のモデルとして野中ら¹⁷⁾のSECIモデルを紹介している。本研究では、このようなモデルが、浦河べてるの家から生まれた当事者研究に適用できるかどうかを検証したい。そのことにより (1) 企業における知識創造活動と地域福祉活動・当事者自助活動との対応関係があきらかにされ、(2) 知識創造理論 (ナレッジ・マネジメント理論) が福祉活動分野に拡張される可能性が証明され、(3) 当事者研究が知識創造活動として新しく位置づくという、3つの成果が期待される。

—— 目的

本研究の目的は、浦河べてるの家をはじめとした当事者研究の理論と実践に知識創造理論から生まれた4つのモードによるSECIモデルが当てはまるかどうかを検討することである。

16) パース 伊藤邦武 訳 (2001)『連続性の哲学』岩波書店。

17) 野中郁次郎・紺野登 (2003)、前掲書9)。

——方法

べてるしあわせ研究所・向谷地 (2009)『レッツ！ 当事者研究 1』¹⁸⁾の第2章には当事者研究の理念が17項目にわたって述べられている(表2)。これが入手可能な文献の中で、現時点での最も詳しい当事者研究の理念の説明であると考えられる。これらの各項目と、当事者研究の他の文献を手がかりにSECIモデルによるプロセスが、当事者研究においても行われているのかを理論的に検証する方法を採る。なお以下の引用文はすべて同書からの引用である。

手続き：表2の17項目が、SECIモデルの4要素(モード)にどの程度該当するかについて評定を行った。著者が自ら4要素について評定値の合計値が100になるように各理念ごとに評定し、その評定値から距離行列を作成して、多次元尺度法(MDS)¹⁹⁾による布置を行った。その後、布置図にしたがって、各理念がどのような内容の特徴で各モードに関わるのかを検討し、当事者研究の理念とSECIモデルがどの程度適合するのかについて内容的な考察を行った。

——結果と考察

多次元尺度法(MDS)によって得られた布置図を図3に示す。図3より共同化に関わるものとして理念(1)(3)(4)(5)を、表出化に関わるものとして理念(6)(8)を、連結化に関わるものとして理念(2)(7)(9)を、内面化に関わる項目として理念(10)(14)(16)を抽出した。中央のグループに分類された理念(11)(12)(13)(15)(17)は4つのモードのサイクル全体に関わったり、2つ以上のモードに関わっている分類不能なものと解釈し、考察を行った。

表2 当事者研究の理念

番号	理念の内容
1	自分自身で、ともに！
2	「自己病名」を決めよう！
3	「弱さ」は力
4	経験は「宝」
5	「苦勞の棚上げ」をする
6	「見つめる」から「眺める」へ
7	「考える」ことの回復
8	「人」と「問題」を分けて考える
9	主観・反転・“非”常識
10	生活の場は大切な「実験室」
11	いつでも、どこでも、いつまでも
12	にもかかわらず笑うこと(ユーモア)
13	「言葉」を変える
14	「行い」を変える
15	病氣も回復を求めている
16	当事者研究は頭でしない、足でする
17	これからも新しい理念が付け加わる

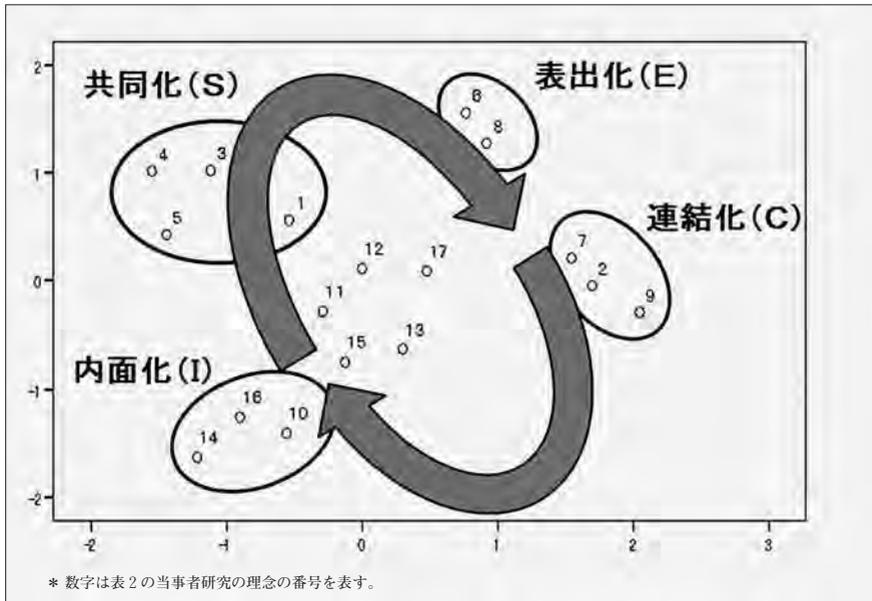
* (べてるしあわせ研究所・向谷地20)より筆者作成

18) べてるしあわせ研究所・向谷地(2009)、前掲書1)。

19) 足立浩平(2006)『多変量データ解析法：心理・教育・社会系のための入門』ナカニシヤ出版。

20) べてるしあわせ研究所・向谷地(2009) 前掲書1)。

図3 多次元尺度法 (MDS) による当事者研究の理念の布置図



1 当事者研究における共同化 (Socialization) のプロセス

浦河べてるの家は、集団的な自助研究活動である当事者研究の発祥の地である。なかでも「弱さの情報公開」は浦河べてるの家における代表的な理念の一つである。浦河べてるの家では、失敗やいきづまり、病気、不安、悩みなどの否定的エピソードは、エピソードへの愛着とその大変さを体験してきた本人へのねぎらいと尊敬を込めて、「苦労」と呼んでいる。「弱さの情報公開」により一人の苦労をみんなで理解する、「苦労の共有」が行われる。

これは、当事者研究のスローガンにおける「自分自身で、ともに」の「ともに」の部分的重要であり、体感や実感の重視という観点からすると、「当事者は病気の専門家である」²¹⁾という言葉が、暗黙知に基づく専門家という事で理解できる。

組織内外の活動による現実直感は、日常的な「苦労」を研究の題材としている当事者研究にあてはまる。感情移入・気づき・予知の獲得については、同じ病気の自助グループによる当事者研究では「苦労」を共にしつつも、一人ひとりの表れ方は多様である。そのような暗黙知の共通性と差異性を体感することが当事者研究では重要である。

21) Kleinman, A. (1988) *The Illness Narratives*. (江口重幸・五木田紳・上野豪志 訳『病いの語り：慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房、東京都、1996)。

多次元尺度法による図3の結果により、(1) (3) (4) (5) の理念が特に共同化のプロセスと関連していると考えた。(1) 自分自身で、ともに！、という理念は、「自分のかかえる苦勞への対処を専門家や家族に丸投げしたり、あきらめたりするのではなく、自分らしい苦勞の取り戻しを通じて『苦勞の主役』になろうとする」ところにあるとしている。当事者研究は「仲間と経験を分かちあい、専門家や家族とも連携しながら、自分にやさしい生き方—暮らし方を模索していく営み」という共同的な研究活動なのである。この自分自身で、ともに！、という理念は、もともとフッサールの現象学の考え方²²⁾である。フッサールの現象学からいえば、「ともに」という表現が体験の「共同化」を端的に表わしていると説明できる。またこの理念は、中央のクラスターにも近く(図3)、スパイラル全体を表わしている基本的な理念であるともいえる。また、(3)「弱さ」は力、の理念も「共同化」のプロセスに深く関連しており、浦河べてるの家では以下のように説明されている。

当事者研究では、お互いの弱さや苦勞をありのまま持ち寄ることによって、その場に連帯が生まれ、人の苦勞や弱い部分が、そのまま人を慰め励ます力に変えられることがあります。

「弱さ」には、人と人をつなげ、謙虚にさせ、新しい可能性を生み出す力があるのです。

暗黙知の「共同化」の前提としての弱さは力であり、また病いからくる「弱さ」を持っていることは、見方を変えると当事者が自分自身の経験についての専門家であるということを示している。「共同化」とはこのような弱さの情報公開を行う第一歩なのである。

また、「共同化」と関わる(4) 経験は「宝」、という理念は以下のように説明されている。

当事者研究では、どのような失敗や行きづまりの経験のなかにでも、そこには未来につながる大切な「宝＝大切な生活情報(資源)」が眠っているという理解をします。今の苦勞や困難を解消する知恵とアイデアの素材は、自分自身と仲間の経験のなかに眠っているからです。

問題だらけで、出口の見えない状況の中でも、その「問題」の中心に、大切な新しい生き方の情報が蓄積されています。そして、その経験は誰にとっても有用な生活情報として活用される価値がある大切な資源なのです。

22) 谷徹(2002)『これが現象学だ』講談社、pp.15-22。

経験という宝は自分だけが持っている「暗黙知」である。その宝を共有する作業が「共同化」であり、さらに、それを「問題」として形式知に転換し蓄積するのは、「表出化」の作業である。

(5)「苦労の棚上げ」をするという理念も、「共同化」のプロセスだけでも場合によっては問題解決の効果があるということを示している。

当事者研究では、かかえている問題に対して、「研究すればいい」と立ち位置を変えると問題そのものは何も解決していないのに、解消されるということがおこります。これを「苦労の棚上げ効果」といいます。あいかわらず困りごとはたくさんあるけれど、あまり負担を感じなくなる。問題だらけの日々の上で安心してあぐらをかいて座っている。自分の助け方の達人は特にこの「苦労の棚上げ」の技を使っています。それは、先の見えない苦労が、大切な苦労へと変わっていくことでもあります。

当事者研究をするという行為自体が苦労の共有であり、仲間に話を聞いてもらったことによる効果だと推察される。これは、カウンセラーに話を聞いてもらっただけで心の負担が軽くなるというカウンセリングの効果に共通するものといえよう。

II 当事者研究における表出化 (Externalization) のプロセス

「表出化」に主に関連する理念としては理念 (6) (8) が考えられる。まず、(6)「見つめる」から「眺める」へ、の理念は次のように説明されている。

誰でも、自分のつらい体験を思い出したり、苦しい現実に向き合うことに抵抗を感じたり、回避しようとしています。ですから「自分を見つめる」ということに不安や恐れを感じる人がいます。

しかし、当事者研究では基本的に「自分を見つめる」ということはしません。そうではなくて、研究に必要と思われる自らの経験や生活情報を互いにテーブルに広げるように出し合い、それを眺め、見渡しながら並べ替えたり、議論しあいながら苦労の起き方のパターンを考えたり、その意味を考えたりする作業を行います。

実際の当事者研究の場面では、ホワイトボードが用意されて、ファシリテーターが本人とやり取りしながら、そこに図や説明を書いて行く。このような図や言葉による表出は、もやもやとした問題を、言語やイラストによって「表出化」する作業であるといえよう。傾聴を重視するクライアント中心療法などの、心理療法との違いがここにある。「眺める」とは自分自身の暗黙知を客観化することで

ある。それを当事者研究のプロセスのなかでホワイトボードなどに記入し、形式知に転換していくことは「表出化」の一環であると考えられる。

次の理念である(8)「人」と「問題」を分けて考える、は以下のように説明されている。

トラブルが起きて、当事者の周辺にさまざまな困難が山積してくると、いつのまにか「人」と「問題」が一緒になって、その人自身が「問題扱い」されがちで、自分もつい自分自身を問題視しがちです。そこで「人と問題の切り離し」が大切になってきます。

具体的には、「“問題”の外に出る」「“問題”を外に出す」「“問題”を置き換える」という方法を取ります。そのことによって「とらわれ」が「関心」に、「悩み」が「課題」に、「孤立」が「連携」へと変わっていきます。

「問題」という形に定式化し、苦労を人に帰属する「基本的帰属の誤り」を克服することは、暗黙知を整理して、より客観的な形式知に変換する「表出化」に対応するのである。浦河べてるの家では、人と問題を切り離す作業を「外在化」とも呼んでいる。

これらの2つの理念は、暗黙知から形式知に変換する活動のプロセスである表出化の当事者研究における特徴を端的に表している。人が問題なのではなく、問題が問題なのであるという「問題と人との切り離し」すなわち「問題を外在化」する活動である。このような活動により、こらえきれないどうしようもないと思われる「苦労」が苦労しがいのある苦労へと変換される。それは、問題を言語化したり、図示や文字で記録することにより可能になるのである。

暗黙知を明確に言語化して形式知に変換する表出化の段階で、「幻聴さん」や「圧迫」「お客さん」「身体の誤作動」「看板の置き換え」「苦労」「ジャック」「爆発」などの隠喩(メタファー)や類推(アナロジー)を当事者研究では良く使う。経営学の場合でも、企業経営のためのコンセプトができるときには、モデルはメタファーから作られるといわれる。

いとう他²³⁾によれば、浦河べてるの家のメタファーである「誤作動」や「爆発」のように人間が機械のメタファーを使うことにより、より問題を外在化・客観化できる。

23) いとうたけひこ・小平朋江・穴澤海彦・井上孝代(2010)「タイダルモデルと浦河べてるの家：英国と北海道から生まれた精神障害者のためのコミュニティ的人間関係援助」『和光大学現代人間学部紀要 3』pp.197-207。

この論文は、英国におけるタイダルモデルでは海や船の比喩を用いるのに対して、浦河べてるの家では「幻聴さん」などの“擬人化表現”や「爆発」「誤作動」などの“機械的表現”が比喩の特徴であること指摘している。

比喩や類推、仮説的推論、物語を用いた暗黙知の明示化の例としては、「幻聴さん」「お客さん」などの擬人化や「爆発」「バラバラ」「ぱぴぷぺぽ」などの比喩を用いている。

暗黙知を概念や原型（プロトタイプ）に変換するには、集団で行う当事者研究の場合にはホワイトボードや仲間とのディスカッションが用いられ、言語化や図示化が行われる。一人で行う当事者研究では、メモや日誌などの記録による概念化が行われる。問題をそのように視覚化・記号化しモデル化することにより、より共有される認識が増え、未分化ながらもダイナミックな知識がえられる。自分の体験的苦労を踏まえてプロトタイプとしての具体化が行われるのである。

Ⅲ 当事者研究における連結化（Combination）のプロセス

「連結化」の過程は形式知の組み合わせによる情報活用と知識の体系化であり、まさに「研究」らしいプロセスである。形式知の収集と統合化、概念間の関係生成とモデル化、形式知の編集、操作化、システム化が行われる。そして、これらの成果がコミュニティにおける直接経験として集積され、操作化され、システムとして機能するのである。

ここでは、(2)「自己病名」を決めよう！、と(7)「考える」ことの回復、と(9)主観・反転・“非”常識、の3つの理念が関連している。

(2)「自己病名」

当事者研究では「自己病名」を考えることを大切にしています。

「自己病名」とは、主治医からもらった医学的な病名ではなく、自分の苦労のパターンを見きわめて、仲間や関係者と一緒になって楽しく考えていったなかで与えられるものです。

「自己病名」を考える上でのポイントは、自己病名を見ただけで、その人の苦労が透けて見えることと、ユーモア精神を発揮することです。研究の過程で「自己病名」は変わってもOKです。

自分の苦労が言語化された後に「自己病名」という、より整理された形式知に概念化（統合化）するのは、形式知をより高度化する「連結化」とも解釈できるだろう。研究の進展、苦労の進展につれて「自己病名」は変化していく。概念化（統合化）のためには対話という共同作業が重要である。「三度の飯よりミーティング」という浦河べての家のスローガンにあるように対話による共同作業が行われる。

(7)「考える」ことの回復

当事者研究では、「考える」という営みの回復を大切にしています。

それは精神障害とは「考える」という人間の最も大切な営みを困難にするからです。しかし、私たちは当事者研究に参加することを通して、自然な形でその営みを取り戻すことができます。

当事者の生活場面には、実に数多くの「考えること」につながる苦労の「素材」が眠っています。それは、料理に例えると「素材」をもとに、工夫を凝らして一人ひとりが自分に合うメニュー（生き方のメニュー！）を考えて、調理していくようなものです。

このように考えることを回復することは、表出化と連結化の両方に関わることも考えられるが、特に仲間の力を借りて（「ともに」）、形式知をより高度な形式知に変換することは「連結化」の作業に該当すると思われる。

(9) 主観・反転・“非”常識、の理念については以下のように説明されている。

当事者研究では、当事者自身が見て、聞いて、感じている世界を尊重し、受け止めようとする姿勢を大切にしています。そのためには、当事者が抱えている幻覚や妄想などのエピソードも、共にその世界に降り立ち、現実を共有し、苦労に連帯しながら、新しい生き方のアイデアを一緒に模索し、探求します。

さらに、既成概念や常識を反転させたりして、苦労の現実が持つ新しい可能性を見出そうとします。そして、ワイワイ、ガヤガヤ、あーだ、こーだの自由な雰囲気ですり合い、議論しあう研究のなかから、思いも寄らないユニークな研究成果が生まれます。

主観・反転・“非”常識、の理念は議論の中で常識的な形式知を、思いもよらぬ新しいアイデアという形式知に変換する「連結化」に該当する。その際には常識にとらわれない、既成概念や常識をも反転させる型破りの発想も重要なのである。

IV 当事者研究における内面化（Internalization）のプロセス

「内面化」のプロセスは、形式知を行為・実践を通じて具現化して新たな暗黙知として理解し、学習することである。浦河べてるの家の当事者研究での源泉のひとつとしてSST（Social Skills Training：社会技能訓練）がある²⁴⁾。SSTでは形式知として得られたアイデアを、ロールプレイにより体感や実感をとおしてスキルや気づきの形成を含んだプロセスを経て、実践に生かせる暗黙知に変換される。これ

24) 伊藤絵美・向谷地生良（2007）『認知行動療法、べてる式』。医学書院。

は、省察的実践²⁵⁾を通じた形式知の具体化・実践化であり、目標—成果の持続的
追求のプロセスである。

この例として、(10) 生活の場は大切な「実験室」、(14)「行い」を変える、
(16) 当事者研究は頭でしない足です、の3つの理念が該当すると考えられる。

(10) 生活の場は大切な「実験室」

当事者研究で大切にしていることは、かかえている苦労や起きている困難
な出来事を共有するために、絵に書いてみたり、苦労の内容をロールプレイ
で実際に演じてみたり、物に置き換えてみたり、具体的に練習したりするな
ど、さまざまなツールを積極的に活用します。

そして、「何がどうなっているのか」と「何をどうすればよいのか」が明
らかになり、研究の成果が目に見える形で日常の生活のなかに具体的に実現
され、生かされ、安心が増えいくということを大切にします。その意味でも
生活の場は試行錯誤を可能にする大切な「実験室」なのです。

得られたアイデアという共有化された形式知を実際の場面で具体的に実現した
り、生活に活かしたりする。そのことは、仲間と共に得られた形式知を、気づき
やスキルを含む暗黙知へ転換していくという「内面化」の過程である。

(14) 「行い」を変える（原文では²⁶⁾ (13) と一括して説明されている）

当事者研究では、行き詰まりを打開する方法として、困難を語る「言葉
を変えていく」「行いを変える」ことを重視します。

その「言葉」と「行い」によって目に見える現実の苦労の風景が変わるこ
とがあります。その意味で「当事者研究」とは、現実を物語る新たな言葉を
創造し、言葉を育て、「振る舞い」を生み出していく作業であるということ
ができます。

それは、かつて浦河べてるの家のメンバーの松本寛さんが「統合失調症は
友達ができる病気です」と語った言葉によって、私たちがかかえる病気や生
きる場がまったく違った風景で見えるようになり「統合失調症のブランド化」
を促したように、「悩む」ことが「研究」することになり、「思い煩う」こ
とが「考える」に、「とらわれる」ことが「観察」に、「病気の失敗」が「有
用な人生経験」へと変わっていくのです。

25) Schoen, D.A. (1983) *The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action*, Basic Books, New York.
(柳沢昌一・三輪建二 監訳 (2007)『省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』風
書房)。

26) べてるしあわせ研究所・向谷地 (2009)、前掲書1)。

これは、得られた形式知を行動・実践して暗黙知として理解・学習する結果、「行い」が変わっていくことを表現している。

(16) 当事者研究は頭でしない、足です

研究というと、どうしても机に座って頭でいろいろと思考をめぐらすというイメージがあります。しかし、当事者研究では、足（身体）を使って具体的に行動し、人と出会い、困難な現実立ちながら仲間と一緒に考えるというプロセスを大切にしています。

この項目と前の (10) (14) とが共通することは、当事者研究の成果（アウトカム）が自分の苦労を助けるための実践、すなわち具体的な行動によって示されているということである。

V 当事者研究における全体的なプロセス

図3の中央に位置する5つの理念は、それ以外の4つの要素には分類されず、むしろ全てと関わるもの、あるいは当事者研究全体の理念を表すものとして位置づけられる。

(11) いつでも、どこでも、いつまでも

当事者研究は、時間と場所、期間を選びません。必要なとき、必要な場所で、必要な時間（期間）、いつでも進めることができます。そこには、困ったとき、行きづまりを感じたとき、悩んだとき、不安なとき、そして、「当事者研究なんか、どうでもいい」と投げやりになったときにも、ちょっと立ち止まって一言「研究してみよう！」と言う勇気が必要になってきます。

この項目は、当事者研究が繰り返されることにより、だんだんと認識が深まっていき、苦労が改善されていくことを示しており、SECIモデルの図からいえば中央のらせんのプロセスと対応しているともいえよう。

(12) にもかかわらず笑うこと（ユーモア）

当事者研究という場には、いつもユーモアと笑いが絶えません。ユーモアの語源が「にもかかわらず笑うこと」といわれるように、「笑う」ということは、究極の「生きる勇気」だともいえます。

いつもユーモアと笑いを絶やさないとこの理念は、4つのサイクルに共通する当事者研究の心構えを表しているといえよう。

(13) 「言葉」を変える（原文では²⁷⁾ (14) と一括して説明されている)

当事者研究では、行き詰まりを打開する方法として、困難を語る「言葉を変えていく」「行いを変える」ことを重視します。

その「言葉」と「行い」によって目に見える現実の苦勞の風景が変わることがあります。その意味で「当事者研究」とは、現実を物語る新たな言葉を創造し、言葉を育て、「振る舞い」を生み出していく作業であるということが出来ます。

それは、かつてべてるのメンバーの松本寛さんが「統合失調症は友達ができる病気です」と語った言葉によって、私たちのかかえる病気や生きる場がまったく違った風景で見えるようになり「統合失調症のブランド化」を促したように、「悩む」ことが「研究」することになり、「思い煩う」ことが「考える」に、「とらわれる」ことが「観察」に、「病気の失敗」が「有用な人生経験」へと変わっていくのです。

これは、当事者研究の成果（アウトカム）のある側面を表しているといえる。すなわち (14) 「行動を変えること」が「内面化」に焦点が当たっているのに対して、言葉を変えて行くことは、むしろ、形式知の操作を中心とする「表出化」と「連結化」に焦点が当てられているとも言える。しかし、当事者研究全体が新しい言葉を生み出して行くことに関わるのでここに位置づけた。

(15) 病気も回復を求めている

当事者研究では「病気も回復を求めている」という考え方を大切にします。つまり、「病気が自分の生活をジャマしている」「病気さえなかったら」という生き方ではなく、自分が病気の足を引っぱらない生き方や暮らし方を見出すという点に着目します。病気や症状のシグナルは、私たちが回復に向かわせようとする大切な身体のメッセージでもあるのです。

この記述は、古くさかのぼっては、ヒポクラテスの自然治癒力の考え方に起源を求めることができよう。「病気や症状のシグナルは、私たちが回復に向かわせようとする大切な身体のメッセージ」という考え方は、高度な形式知であり、それを生活世界の中で実践していくなかで自分の信念として暗黙知として定着する。そう考えると、「内面化」の過程と深く関わるようにもみえる。しかし「病気も回復を求めている」という表現は、一種の思考法の転換でもあり、当事者研究のプロセス全体を貫く理念であるともいえる。

27) べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）、前掲書1）。

最後に上記の4つのプロセス(モード)のどれかに該当するというよりも、全体のスパイラルに当たるすべての過程に該当するのは、前の(11)「いつでも、どこでも、いつまでも」に加え、次の(17)「これからも新しい理念が付け加わる」の2項目である。

(17)「これからも新しい理念が付け加わる」

当事者研究の理念は、多くの研究活動の中から生まれた大切な指針です。そして、これからも当事者研究の現場から、新しい理念が生まれ加わっていくことでしょう。

一般に、理念や指針は高度な形式知なのであるが、ここではサイクルの中での形式知の発展を表す、「表出化」と「連結化」のどちらにもあてはまると見なすことも出来る。しかし、当事者研究のプロセスを繰り返し続けていく中で、新しい理念が生まれ加わっていくことを考えると、当事者研究のスパイラル、サイクルの全体的な過程を良くあらわしている理念と考える方が良いと思われる。

実存的に知を生み出すための本質的な「知」の8つのディシプリンとして、野中ら²⁸⁾は、1) エポケーの知のディシプリン、2) 対話の知のディシプリン、3) アイデアの知のディシプリン、4) アブダクション(=仮説生成、またの表現をレトロダクション)の知のディシプリン、5) メタファーの知のディシプリン、6) メカニズムの知のディシプリン、7) プラグマティズムの知のディシプリン、8) 弁証法的(多面的)総合の知のディシプリン、を挙げている。これらは、見事に浦河べてるの家の当事者研究の特徴を言いあらわしている。以下に8項目の説明と当事者研究との対応関係を見てみよう。

- 1) まず、エポケーの知のディシプリンは、状況を「分析」するのではなく状況に投げ出されている自分を受け入れる、事物や対象を見ている自分の意識のあり方をストップし観察するという、フィールドワークの観察記述(エスノグラフィ)のやり方である。これは、グループでの当事者研究の基本的立場と共通している。(4)「経験を宝」にして、(8)「人と問題を分けて考え」、(9)「主観・反転・“非”常識」的な立場から、(12)「ユーモア」をもって、現在を見つめ直し、(3)「弱さを力」として認識していく。
- 2) 対話の知のディシプリンでは、発展進化する産婆術の対話の尊重、常に前提から問い直すような対話の実践、弁証法的展開、と説明されている。これは、グループでの当事者研究では、わいわいがやがやの対話のプロセスにより、問題を他の視点からも(6)「眺め」、(8)「人と問題を分けて考え」、

28) 野中・紺野(2003、前掲書9)、pp.144-145。

多面的な意見交換をしていく。

- 3) アイデアの知のディシプリン、すなわち、思い・独自のビジョンを求める。アイデアを見ることでの「現実」からの覚醒、「理想型」から現実を見る、という点では、自分自身で(2)「自己病名」をつけ、現実を離れて(9)「主観・反転・“非”常識」な観点から、(7)「考えることを回復する」作業を行っている。
- 4) アブダクション(=仮説生成、またの表現をレトロダクション)の知のディシプリンでは、演繹思考や帰納思考からの飛躍を行い、仮説推論を実践することにより、直感・洞察から因果を把握することを推奨しているが、これも、(2)「自己病名」による問題を再定義づけ、(10)「生活の場を実験室」にしながら、(13)「言葉」と(14)「行い」を変えるための、(7)「思考の回復」を行っているのが当事者研究であるといえる。
- 5) メタファー(隠喩)の知のディシプリンでは、メタファーによりとらえどころのないものを系統的に理解する、全体的で包括的な理解と表現を経て、メタファーとアナロジー(類推)からモデルへの転換がなされるとする。浦河べてるの家の当事者研究においては、メタファーやアナロジーがユーモラスに活用されている。例えば、人の行動に否定的な影響を与える認知や思考のことを「お客さん」と呼び、どう対応するかを考える手掛かりとする。また、「幻聴」ではなく「幻聴さん」と擬人化することにより、その「つきあい方」を具体的に考えることが推進される。なお、「幻聴さん」は早くからイラスト化され²⁹⁾、「お客さん」と、身体で感じる圧迫感を表わす「誤作動くん」とあわせて団子みたいにまとめてやってくることから「病気3兄弟」としてもイラスト化されている³⁰⁾。また、関係に行き詰ったりしてストレスがたまったときに人や物に否定的感情をぶつけることを「爆発」とよんでいる。調子の悪いときの状態の表現も、早坂潔氏のケースから「バラバラ」、「ばびぶべぼ」などの表現が共有されている。
- 6) メカニズムの知のディシプリンとは、事物の背後にある現象発生のダイナミクスの構造的見方、「行為と構造の相互作用」という視点、潜在的なメカニズムをモデルとしてデザインし、システム的な図式を抽出することである。その例として、林園子たちの当事者研究である「くどさの研究」の研究結果を表3に示す。「くどうくどき」とは、幻聴や否定的認知によって行動が“くどく”繰り返さざるを得なくなってしまう症状であり、オオカミの絵でキャラクター化された。「なつひさお」とは、どういうときに

29) 例えば、すずきゆうこ(2006)『べてるの家はいつもばびぶべぼ』McMedian。

30) すずきゆうこ(2010)『今さら聞けないべてるの基本用語』第18回べてるまつり実行委員会(編)『奇跡の病気・治りませんように: べてるの家の“深化”論』、pp. 28-32。

表3 「くどうくどき」「なつひさお」と「たなかやすお」

「くどうくどき」が出るとき	自己対処
① な : 悩みのあるとき	● ① た : 食べる
② つ : 疲れたとき	● ② な : 仲間
③ ひ : 暇なとき	● ③ か : 語る、体を動かす
④ さ : さびしいとき	● ④ や : 休む
⑤ お : お腹がすいている	● ⑤ す : すぐ相談
● お金がない	● ⑥ お : おろす、送ってもらう
● お薬があってない	

*すずきゆうこ (2010) 31) より作成

「くどうくどき」が出るかの自己チェックに用いられる。そしてその対処法が「たなかやすお」として定式化されたのである³²⁾。

7) プラグマティズムの知のディシプリンとは、道具としての知識や知、「仮説」を道具として用いる、未来を生み出す知というとらえ方、高邁な知を求めつつ現実的結果や利益を軽視しない、と説明されている。当事者研究の理念においては、(4)「経験が宝」であることから出発して、(13) 言葉を変える、(14) 行動を変える事により、(10) 生活の場を実験室としながら、(11) いつでもどこでもいつまでも行っていくことにより、(1) 自分自身とともに、苦勞をより良い苦勞に変換することを目指している。

8) 弁証法的(多面的)総合の知のディシプリンとは、弁証法的ダイナミクスで状況や対象に関わる、執拗な知の創造と実践の繰り返し、「恥知らずの複眼的思考」と説明されている。「恥知らずの複眼的思考」とはまさに、(9) 主観・反転・“非”常識、を彷彿とさせる表現である。

このように、以上の8つのディシプリンは、それぞれ、SECIモデルの4つのモードと対応しているのである。

31) すずきゆうこ (2010)、前掲書30)。

32) すずきゆうこ (2010)、前掲書30)。

— まとめ

以上、野中らのSECIモデルが、浦河べてるの家から発祥した当事者研究をもよく説明できるということを仮説生成的に証明することができた。

「自分自身で、ともに！」という理念に立った当事者研究は、統合失調症などの精神障害を持つ当事者の生活の質の向上に成果をあげてきている。

経営学におけるナレッジ・マネジメント（知識経営）理論の知識創造モデル（SECIモデル）は、(1) 個人的な暗黙知を共同的で共感的な暗黙知に変換する「共同化モード」と、(2) 共同の暗黙知を概念化された形式知に変換する「表出化モード」と、(3) より高度な形式知に変換する「連結化モード」と、(4) 形式知を行為・実践を通じて実践的な暗黙知へと結晶化させていくという「内面化モード」の4つのサイクルから成り立っている。

この4つのサイクルのプロセスと、知識の4つの特質（脚注6参照）は、浦河べてるの家をはじめとする当事者研究をも特徴付けるものであるという仮説に基づき、書籍等で公表されている当事者研究の理念と実例を示すことにより、モデルの適合度を検証した。そのことにより(1) 企業における知識創造活動と地域福祉活動・当事者自助活動との対応関係、(2) 知識創造理論が福祉活動分野に拡張される可能性、(3) 知識創造活動としての当事者研究の新しい位置づけ、という3点が明らかにされた。

また、知識創造理論³³⁾は知識の特質を、(1) 全人性：論理のみならず信念（価値）や身体化されたスキルを包含したものである、(2) 文脈依存性：時間・場所・人との動的な関係性の中で立ちあらわれる、(3) 多視点性：一視点からの「情報」ではなく多視点から真理に接近するプロセス、(4) 可謬性：仮説を立て理論を反復しつつ真理に接近するプロセスである、という4つの観点から整理している。この知識の規定は、まさに当事者研究で創造される知識の特質そのものであるといえる。

いとう・小平・向谷地（2011）³⁴⁾は、企業活動としての知識創造と当事者研究との比較を行い、いとう・小平・向谷地（2010）³⁵⁾の当事者研究の特徴付けの観点から、活動成果としての4つのC（具体的、建設的、創造的、共同的）は共通であると考えられるが、活動過程としての3つのH（人間的、ユーモラス、場当たり

33) 野中郁次郎・遠山亮子（2006、前掲書4）。脚注6）にも紹介した。

34) いとうたけひこ・小平朋江・向谷地生良（2011）「『自分自身で、共に』という当事者研究が開く世界：知的創造モデルの観点から」、心理教育・家族教室ネットワーク第14回研究集会 発表資料（未公開）。

35) いとうたけひこ・小平朋江・向谷地生良（2010）「ナラティブとしての当事者研究：浦河べてるの家から」『日本質的心理学会第7回大会プログラム抄録集』、p. 98。

的)については、新製品やアイデアを作り出すことを目的とした企業活動と、人間関係や苦勞の改善のためのアイデアを創り出すことを目的とした当事者研究との比較を行うことを提起している。これを踏まえ、企業活動における知識創造活動と、コミュニティレベルでの知識創造共同体の活動の比較を明確化することが今後の課題である。また集団療法との比較³⁶⁾や、体験学習理論との比較³⁷⁾やSECIモデルと近似したモデルとの比較³⁸⁾も今後の課題である。

付記：原稿を詳しく検討して改善してくれた小平朋江さん（聖隷クリストファー大学）、大高庸平君（和光大学大学院）に感謝する。また、資料整理を手伝ってくれた武藤瑛さんに感謝する。

[いとう たけひこ]

-
- 36) Yalom, I. (1975) *The Theory and Practice of Group Psychotherapy*, NY: Basic Books. この本の中で集団心理療法家である Yalom は治療的なグループの治療的因子として、(1) 希望をもたらすこと、(2) 普遍性、(3) 情報の伝達、(4) 愛他主義、(5) 初期の家族関係の修正的繰り返し、(6) 社会適応技術の発達、(7) 模倣行動、(8) 対人学習、(9) グループの凝集性、(10) カタルシス、(11) 実存的因子の11の因子を挙げている。
- 37) 津村俊充、石田裕久編 (2010) 『ファシリテーター・トレーニング：自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ 第2版』ナカニシヤ出版。この本の中で、体験学習は、具体的な体験→体験の内省と観察→抽象化と一般化をする→自分の行動の仮説化をする、という4つのステップの循環過程であるとしている。これは、ほぼSECIモデルと対応している。
- 38) 網谷重紀・堀 浩一 (2005) 「知識創造過程を支援するための方法とシステムの研究」『情報処理学会論文誌』446 (1)、pp. 89-102。この論文では、SECIモデルに殆んど近似しているモデルとしての知識創造過程を支援するシステム (KNC4ED) を提案している。このモデルの前提となる「知識の液状化と結晶化」と「知識星雲結晶装置 (KNC)」によれば、図2の上の部分の「共同化」と「表出化」の2つの相が、「知識の液状化」に該当し、「連結化」と「内面化」という下の部分の2つの相が「知識の結晶化」に相当する。かれらのいうKNC4EDシステムの特徴として、「情報自体の有効性」「液状化の有効性」「空間上に提示したことの効果」「結晶化の有効性」「インタラクションの効果」「概念—実世界の結合」、「全体—部分の往復」がある。浦河べてるの家の当事者研究との対応関係が興味深い。